

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町塩口24
電話2-9772

知夫村の教育活動

知夫村教育委員会が取り組んでいる教育活動の様子を紹介いたします。

【切れ目ない支援体制の構築に向けて】

地域の宝である子供たち一人一人に合った支援が、早期から実現できることを目指して、体制づくりに取り組んできました。具体的には、
・相談支援チームによる定期の保育所訪問を年二回にすること
・五歳児健診に、相談支援チームや教育委員会が関わるようにすること
の二つを昨年度から実施しました。五歳児健診については、事前健診の行動観察に相談支援チームが、また、健診後のカンファレンスには教育委員会も参加する形にし、医療・福祉・教育機関が連携して、五歳児健診や健診後のフォローに関わるような体制とし

ました。また、健診当日には、教育委員会のブースにおいて、保護者に、就学に向けて心配なこと等を聞いたり、知夫村の相談支援体制について周知したり、さまざまな学びの場について情報提供したりしています。

知夫村では、子育ての記録として活用してもらおうことを目的として、子育てファイル（のびのびファイル）を作成し、新生児全員の家庭に配布しています。このファイルは、相談支援ファイルとしても活用しており、就学の際には、「一貫支援シート」（保護者から学校へ、保育所から学校へ）の作成・提出をそれぞれにお願ひし、保育所での支援を学校での支援に繋げていく仕組みとしています。
「のびのびファイル」の開から、今年度で五年が経ちました。様式、あるいは、活用する方法を検討し、就学してからの「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」等も含め、

より有効に活用することで、支援が繋がると考えています。

体制が整いつつある今、切れ目ない支援の意義について共有し、これまで以上に、支援を繋げるために繋ぐ手を、確かなものにしていきたいです。
（文責 派遣指導主事 福山）

【九年間を見通した特色ある宿泊体験活動】

知夫村では「知夫里島学舎構想」に基づき、小中一貫校を開校し、九年間を通した教育に力点を置いています。一貫教育の本格実施に伴い、これまでに各委員・関係機関の皆様と本校の特色ある取組づくりを検討してきました。その特徴的な取組が「九年間を通した系統的、発展的な宿泊体験活動」です。（左図）

自立・協力・感謝	
中1 3	ふるまい向上合宿(5泊) ・自立を目指した生活体験 ・キャリア教育 ・協働的な合宿生活
小5 6	島南町で泊まる(3泊) ・島外で泊 ・長泊(恩、感謝、ふれあい) ・村でできない事前体験
小1 4	初めてのキャンプ(1泊) ・自宅外で泊 ・スタッフや友達と協力 ・身近な野外での体験

発達段階に応じて①小学校低中学年による野外活動体験、②小学校高学年による島外での民泊交流・体験、③中学生による自立した合宿生活体験という三つのステップに整理しています。九年間を通して子供たちの「生きる力」と「豊かな心」を育む宿泊体験活動となるよう、泊教や活動内容も徐々にステップアップさせています。

本村では、中学校の卒業生の何割かは本土へ進学するケースが見られます。様々な状況を想定し、中学校卒業時までに生徒の自立心を育んでおくことは学校・家庭・地域の強い願いでもあります。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の面から、「できることをできる範囲で行う」という考えのもと、活動内容を変更して実施の予定です。今後も学校教育と社会教育の一層の連携・協働を図り、系統性と発展性を加味しながら、「自立・協力・感謝」を目指した活動を推進していきたいと考えています。
（文責 派遣会幹事 広兼）



コロナ禍で養う道徳性

例年よりも遅い梅雨明け。自粛ムードで活動も制限。今年の夏休みは、誰にとっても言葉にできない息苦しさを感じた期間だったのではないのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の第二波と思いき感染者の増加とともに、感染者への誹謗中傷、コロナ自粛自警団などのニュースも流れました。日本赤十字社は『新型コロナウイルスの三つの顔を知ろう！負のスパイラルを断ち切るために』を三月に発行しています。これによると、「病気の感染症が「不安」という感染症を呼び、これが「差別」という感染症を生むと書いてあります。ストレスと不安を抱える日々の中でこれら三つの感染症が広がっているのでしょうか。しかしそれと同時に、サッカーの本田圭佑選手や他県の高校生が、感染した高校生に励ましのメッセージ等を送ったニュースも流れました。大人のこのような振る舞い（人権意識・道徳性）は、子供たちの目にはどのように映っているのでしょうか。

特別の教科道徳の指導要領の解説には、「道徳科が目指すものは、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。」とあります。ぜひ子供たちには、世の中で起きていることから「こんな時はどうすることが善なのか」「不安から起こる差別は仕方がないのか」「自分はどういう行動がとりたいか」と身近な人間関係の中で多様な考えに触れ、「自分だったら」と考える機会にして欲しいと思います。コロナ禍の今だから養うことができる道徳性は、将来的にどのような局面を迎えたときにでも発揮されることでしょうか。長期化されるであろう「WITHコロナ」の社会の中で、子供たちがよりよく生きるための道徳性が養われることを願っています。

（文責 藤野）

